

戦後復興期における ヒバード宣教師のもう一つのミッション

枝 澤 康 代

Abstract

For several years I have been reading letters written by Dr. Esther L. Hibbard, who was a missionary of the American Board of Commissioners for Foreign Missions and the first president of Doshisha Women's College of Liberal Arts. In the course of my reading, I realized that during Japan's postwar reconstruction period she held a number of meetings in Japanese about democracy and American life.

Hibbard returned to Japan in fall 1946 after five-year stay in the States necessitated by the war. As soon as she reached Kyoto, she picked where she had left off, resuming her college teaching as well as teaching at the girls' high school and reestablishing her English Bible class at Doshisha Church. Finding the Japanese in dire need, she urgently asked her parents and American supporters to send relief goods including food, clothes, daily essentials and delivered them herself. She was appointed to be chairman of the Japan Branch of the American Board in January 1947. She also took a position as a board member of Kyoto YWCA in charge of the hostel department.

In addition to these hard jobs, she traveled in Kyoto and the surrounding area to make speeches in Japanese about what democracy is and how American people live, in responses to requests by the Japanese. She even made a radio broadcast answering questions about American culture in Japanese. She wrote to her supporters in March 1947, saying "The phase of my work which I scarcely anticipated was the demand for talks in Japanese on American life. If I had foreseen it, I should certainly have gathered more specific data for talks on educational methods, women's societies, current literature and home life."

What made Hibbard take on these jobs? How did she conduct them? This paper will investigate possible reasons for her tireless dedication and describe what she talked about and how Japanese audiences responded.

I. はじめに

筆者はここ数年、アメリカン・ボードの宣教師であり、同志社女子大学初代学長であったエスター・L・ヒバード博士（以後、ヒバード）の書簡を読んでいる¹。その書簡を読み進めるうちに、ヒバードが戦後復興期に日本語で民主主義やアメリカの生活について沢山の講演会を開いていることに気付いた。

ヒバードは、戦争のために5年間帰米していたが、戦後いち早く、アメリカから一般人を運んだ最初の船で、1946年秋に日本に戻ってきた。京都に戻り、荷物を紐解く間もなく、戦前と同様に同志社女学校と女子専門学校の授業を担当し、同志社教会のバイブルクラスを復活した。更に、敗戦後のひどい生活難にあえぐ日本人を助けるために、食料や衣類・生活必需品などの支援物資をアメリカから取り寄せて配布した²。一方、1947年1月にはアメリカン・ボード日本支部の委員長に任命され、ボードの様々な仕事をこなさなければならなかった。また、戦前からの仕事であった京都YWCA理事にも就任し、ホステル部門の担当者となった。

更にその上に、ヒバードは日本人の依頼に応じて、非常に交通事情の悪い中、満員列車に乗ることも厭わず、地方の教会や学校などに出向いて、民主主義やそれを基本とするアメリカ人の生活について日本語で講演をしたのである。ヒバードは、1947年3月の支援者への報告書に、「私がつゆほども予想していなかった仕事というのは、日本語でアメリカの生活について話をすることでした。もしそれが分かっていたら、教育方法、女性社会、現代文学や家庭生活について、もっと具体的な資料をきっと集めてきたはずですよ」（ヒバード、UW-YMCA, 1947, March）と述べている。

ヒバードはなぜあえてこの仕事を引き受けたのだろうか？どのような話をしたのだろうか？本稿はこの予想外の仕事について、ヒバード書簡の情報を元に、できる限りその理由と活動の実態を明らかにしたいと思う。

II. ヒバードの帰米中の経験

ヒバードは、太平洋戦争の始まる8か月前の1941年4月に帰米した。それは、軍国主義政策が日増しに強くなり、アメリカとの開戦が真剣に噂されるようになってきた中で、同志社が外国人教師に対して賜暇を取るように、即ち帰米するようにと、1941年3月に要請したからである³。なるべく日本に残りたいと思っていたヒバードではあったが、時勢に逆らうことは出来ず、4月8日に離日し、1946年10月30日に再来日するまでの5年間をアメリカで過ごした。

アメリカでは、両親の住むウィスコンシン州マディソンを帰省先としながら、かねてから希望していたミシガン大学大学院博士コースに入学して日本の百合若伝説を研究し、1944年6月に *Oriental Civilization* の分野⁴で Ph.D. を取得した。ミシガン大学在学中は、ミシガン大学で実施されていた「陸軍特別研修プログラム」(Army Specialized Training Program/ASTP)⁵で日本語講師を務め、博士号取得後は、シカゴ大学とノースウェスタン大学シカゴ校で日本語と日本文化の講師を務めた。

その5年間でヒバードにとっての最大のショックは、1941年12月8日の真珠湾攻撃であつたらうと思われる。ヒバードは「その日の深刻な気持ちを一生忘れることができない」と、1972年に定年退職を前にした最後のクリスマス説教で述べている⁶。ヒバードの日本に対する気持ちは、その時から非常に複雑になって行った。東京に生まれ、10才まで日本で過ごし、アメリカに帰国してもなかなか母国になじめず、15年後に再び日本に戻った時、「これこそ私の国！」と叫んだヒバードであつた⁷。その後12年間、日本語を懸命に勉強し、歌舞伎、お能、人形浄瑠璃、生け花、琴など日本文化にどっぷりと浸り、帰米直前の手紙には、「心配なのは、我々の将来のことです。問題は、私たちがこの10年間大切にしてきた生活と友情を、再び味わうことが出来るのかということなのです。たとえしばらくして戻ってきても、物事は決して

同じではないのですから」(ヒバード、Wis-HAS, 1941, 03, 30)と書くほどに日本を深く愛していたヒバードであった。それにも関わらず、その愛する国から突然母国を攻撃されたことをどう受け止めたらいいのか。日本へのあこがれ、愛情は吹っ飛んでしまったかもしれない。一方、アメリカ国内では、日本は敵国として厳しく敵対視され、自身も日本生まれということで、しばらくの間日本人扱いをされて、銀行預金の引き出しを差し止めされた悔しさを味わったのである。(ヒバード、Wis-HAS, 1941, 12, 19) アメリカ人の日本への蔑視や差別待遇にも反発を覚えたことと思われる。日本とアメリカ、この二つの国に、それぞれに愛と嫌悪の相反する気持ちを抱いたに違いない。

そのようなヒバードが、1945年に戦争が終わった時に、日本に戻ってもう一度日本のために尽くそうと決心をするようになった背景には何があったのだろうか？ヒバードが日本に戻る決心をするには、不思議な神様の守りの経験⁹があったと、最後のクリスマス説教で述べている以外に、特別な事柄があったとは手紙などには書かれていない。しかし筆者は、陸軍特別研修プログラムにおける日本語講師の経験が、日本に戻ることに、日本で民主主義を伝える決心に大きく影響したのではないかと推測している。

言語を教えるということは、その言語の文化をも教えるということである。ヒバードは、百合若伝説という日本の土着文化をヨーロッパ文明の伝説であるユリシーズと比較する研究を行ったが、日本とヨーロッパ/アメリカの二つの文化を深く研究したことと思われる。そのプロセスの中で、日本文化に根ざす日本人特有の行動様式を分析し、日本人とその言語(内心にある思いが表面に言葉として現れた日本語)を理解し、それまでヒバードが理解していた日本とは異なる新しい日本の発見があったのではないだろうか。同時に、同様の新しいアメリカの発見もあったことであろう。

ヒバードが1929年(昭和3年)同志社に赴任し、戦争で帰米する1941年までの12年間に目をとめると、それはまさに、大正デモクラシーの残る自由な

日常生活から、監視の目が光り、一言も自由には話せない世の中へと変わっていった日々であった。なぜ日本はあのように変わってしまったのかと思わずにいられなかったであろう。国家の在り方というものを真剣に考えたに違いない。その疑問に、陸軍特別研修プログラムを通して漏れ出てくる軍情報、少しは答えを与えたのではないだろうか。

アメリカは、戦争がはじまると間もなく戦争情報局を設立し、相手国の情報を徹底的に集め分析したことはよく知られている。その成果の一つが、*Japanese Behavior Patterns* という報告書の作成であり、アメリカ政府に新しい日本人論を提供したと言われている⁹。戦争の末期には、アメリカは十分に日本を研究し尽くしており、戦後処理も含めて対日政策は出来上がっていたことは周知の事実である¹⁰。

1945年8月に日本は無条件降伏をして戦争は終わった。日本は非軍事化と民主化を実現する国に変革されることになった¹¹。占領軍司令長官となったマッカーサーは早速日本の改革に着手し、憲法改正のみならず、学制改革、財閥解体、農地解放などの教育、社会改革も断行していったのである。

ヒバードは日本に戻るにあたって、地元の新聞のインタビューを受け、「民主主義を伝えるために」日本に戻るのだと答えている¹²。(ヒバード、UW-YMCA) 無論、記事は記者の書いたものであり、アメリカの読者の興味を引くように民主主義をことさらに強調しているかもしれないが、ヒバードに全くその考えがなかったとは言えないだろう。

日本に出発する直前に書いたアメリカの支援者への手紙には、民主主義とキリスト教を伝える意義を丁寧に述べている。少し長いが、以下に引用する。

日本の友人から届く手紙を読んでいると、早くその中に加わりたく焦ります。私が京都で戦前に教えていた学校は、この5年間もなんとか学校の機能を維持していたのですが、今や先頭にたつて民主主義教育を行う絶好のチャンスです。英語教育への要求は、かつてないほどのものです。小学生でさえ夏休み中に英語を勉強しています。軍のジープが側

を通ると、子どもたちは「ハロ、ハロ (hello!)」と声をそろえて叫びます。占領軍の使う言葉を学びたいというこのような熱心さは、無論ご都合主義もありますが、多くの人の心を民主主義の原則とキリスト教の理想へと開かせる鍵ともなり得るでしょう。

現時点で日本人に最も必要なことは、生きる意味と目的を取り戻すことです。国の指導者たちの欺瞞に目覚め、物資の不足に圧倒され、世界の思想から孤立している日本人は、外国からの精神的な助けを熱心に求めています。ある日本人キリスト者が言いましたが、「ビタミンのカプセル以上に私たちが必要としているのは、希望という薬です」。私たちは人々からよりよい未来を求める基本的な権利を奪うことが出来るでしょうか？確かに、この原爆の時代に希望は必需品です。しかし、人間の心を信じる者は、人は自らが招いた自業自得の問題への解決策を見つけることが出来ると、信じて疑いません。

(ヒバード、UW-YMCA, 1946, 09, 04)

このようにヒバードは、日本の民主化に貢献したいと思っていたが、まさか自分がそのことに関して講演をするとは、さらに日本語で講演するとは考えてもいなかったであろう。

Ⅲ. ヒバードの民主主義教育

日本は敗戦により、それまでの軍国主義一辺倒から、猫も杓子も民主主義になった。誰もが民主主義とは何かを知ろうとし、また行政は民主主義を教えようとした。例えば、滋賀県は、国民学校の復員教員に対して、民主主義教育を「吹き込む」2日間にわたる講習会を主催した。(京都新聞、「先生に民主教育」、1945. 11. 05) また、京都新聞は、「、、、婦人参政権が叫ばれている現在、実生活的において米国婦人の実情を知り、真の文化生活と、さらに真の日本女性の道とに対する深い自覚と強い精神を再認識し、大いに温故知新の生活文化を研究して、この世代をたくましく生き抜く女性の心とすがたを確立したいもの、、、、」として、アメリカ女性の洗濯機などを取り入れた能率的な生活を写真入りで紹介している。(京都新聞、「米国婦人の生活」、

1945. 12. 23)

このような状況で、アメリカ人であり、日本とアメリカの実情をよく知っており、しかも日本語ができるヒバードが、講演講師として引っ張りだこになったのはうなずける。ヒバードはその状況を、「婦人会、女子高校、教会の青年会からのアメリカの様々な生活についての講演依頼は、応えられないくらいの数に上りました」と、アメリカン・ボードに提出した報告書“Report Nov.1, 1946-March 31, 1948”¹³の中で述べている。筆者が種々の手紙から数えた講演回数は、記載されていない講演もあるかもしれないが、約1年2ヶ月で25回であった。確実な数字は、ヒバードによると、1946年11月から1947年3月末までで、女学校3回、婦人会5回、青年会3回の計11回である。(ヒバード、Wis-HSA, 1947, March) それ以後は、数えておられなくなったのであろう。

講演テーマについて、ヒバードは前述のボードへの報告書に以下のようにまとめている。

- 1) 家庭における子どもの民主的教育：幼稚園児の母親へ
- 2) アメリカの学生生活：高校生へ
- 3) 若者の社会における西洋のエチケット
- 4) 英語教授法：京都英語教育研究会で

そして、これらの講演を行うために、宮津、舞鶴、福知山、園部、豊中、大阪、神戸に行ったと述べている。ただ、この報告書には、講演テーマとして「民主主義について」と「女性の生活について」が抜けている。また、講演地に京都が抜けている¹⁴。おそらく当たり前過ぎて、報告書を書く時点でヒバードの頭に思い浮かばなかったのであろう。

ヒバードは、ほとんどどの講演でも、聴衆は非常に熱心に聞き、質問をしたと、生き生きと報告している。すべての質疑応答を記録したのではないが、ヒバードの印象に残った質問と答えのいくつかが手紙に残っているので、そのうちの代表的なものを以下に紹介したい。

1) 娘と黒人兵の交際についての質問：

同志社教会の婦人会で、「子どもの家庭教育とガイダンス」の題で話をしたあと、ある母親から会場の隅に連れて行かれ、黒人兵が娘を訪ねてくるのをどう思うかと尋ねられた。その兵は熱心なクリスチャンで紳士のようなのだが、母親は（男性の）アメリカでの社会的立場を気にしているようであった。私（ヒバード）は、できるだけ丁寧に、しかしはっきりと、この場合は、異民族間結婚の問題というよりは、妻の帰化の可能性や、夫もそれを望まないという国際結婚の形になるかもしれないと伝えた。だから、娘が心の中で結婚を考えているなら、それはよくないことだ。しかし母親が兵士を好きで、彼が明らかに寂しそうにしているのを気の毒に思うのなら、自分の甥か従弟のように（親族の一員として）接するようにしたらどうだろうかと言った。母親は私の答えに満足して、安心したようだった。最近の日本には同様の問題をかかえた母親が多いと思う。

（ヒバード、Wis-HAS, 1947. 02. 23）

2) 園部での講演の後の質疑応答：

- ①男性：アメリカの学生は政治的、社会的問題をよく話したり、考えたりするのか。
- ②結婚している女性：アメリカの主婦は、家庭外の活動に参加する時間をどうやって作っているのか。
- ③女子高校の寮の舎監：民主主義というものは無法が含まれ得ることがあるのか。世話をしている女子高生たちが、戦後まったく手に追えなくなっていること、もし咎めたりしたら、民主主義を盾に言い返してくるとのことだった。私（ヒバード）は、自由というのは、人々に法律を破ることを保証するのではなく、それを作ることに参加することだと答え、舎監はその答えに満足したようだ。

（ヒバード、Wis-HAS, 1947. 03. 16）

3) 「京都アメリカ協会」に所属する高校生のコメント：

「アメリカの高校生の生活」という題で、300人の男女の高校生に講演したが、非常によく理解してくれた。帰り道に、3、4人の男子生徒と歩きながら話をした。その生徒たちは、京都大学の予備校とみなされる超優秀な学校である府立一中の生徒であった。彼らは現在の教育システムも教師も手厳しく批判していた。『僕たちの英語の先生の発音は、一人一人違うのです』と。学校では週に5時間英語の授業があるが、ほとんど文法と訳だけだとのことだった。もっとよい（英語練習の）機会が与えられるべきだ。

（ヒバード、Wis-HAS, 1947.02.16）

4) エチケットのデモンストレーション：

洋風エチケットの实演は大成功であった。日本語でうまく説明するのに私（ヒバード）はとても疲れたが。部屋は人であふれ、かろうじて舞台のスペースを確保できた。ジーン・グラント¹⁵は、十代の女の子を演じたが、とてもかわいらしく、自然で、初々しく、上品だった。ロバート¹⁶は、少しおどける傾向があったが、生徒役で大当たりだった。シカゴ神学校の卒業生にその他の男性役－ウェイター、独り者の男性、女の子の父親－の役を無理やり頼んだが、やる気満々で取り組んでくれた。

エチケットの場面は、1) 道を歩いている、2) 乗り物に乗る、3) 映画劇場に行く、4) レストランで食事をする、5) ダンスを踊る、であった。

この実演は非常に好評であったので、ヒバード以外は配役をその都度変更して、いろいろな所で計4回上演した。

5) 300人の女性従業員のいる大きな保険会社での反応：

講演の後に質疑応答があったが、宗教について非常に洞察力のある質問が複数あった。それは女性たちが深く考え、真理を熱心に求めて

いる姿であった。とても残念なことは、この心を開いた人たちに、計画し組織付けられた宗教教育プログラムを、このあと提供する方法がないことである。私（ヒバード）は、一人の患者に薬を与えて次の患者へと走って行き、最初の患者は自分の力で治るにまかせ、与えた薬が長く効くようにと願う医者のように時々感じることもある。

（ヒバード、Wis-HAS, 1948. 03. 31）

最後に、ラジオ放送の様子を紹介したいと思う。どの放送局のものか、いつ放送されたのかも不明であるが、小沢さんという裕福な国会議員の未亡人を相手にして、小沢さんの質問に、ヒバードが日本語で答えるというインタビュー形式で放送された。そのために台本が作成されたが、それには、まず小沢さんが質問し、それに対してヒバードが「できるだけ簡単で、たどたどしい日本語」で答え、それを番組のディレクターが聞き取り、大人の日本語にして台本を作成したとのことである。ヒバードが書いたのではないが、用語はほとんどヒバードの使った言葉が残されたそうである。

残念ながら録音台本は残っていない。放送の反応も記録されていない。しかしヒバードは、自分が台本を読んでいるというのは声の調子で丸わかりだったと反省し、経験を積み技術を身に付ければ、ラジオ放送は素晴らしい教育手段になるだろうと述べている。（ヒバード、Wis-HAS, 1947. 03. 16）

IV. おわりに

以上ヒバードの戦後復興期の活動を、特に民主主義に関する講演活動を中心に見てきた。講演はヒバードの仕事の中で、予想もしていなかったほんの一端の仕事であった。言い替えれば、ヒバードはどれほど多種多様な働きをしていたかということである。タイム・スケジュールをどのように調整すれば、あれほどの仕事ができるのかと驚かされる。

満員列車の席を取るために早朝4時半に起きて駅に行き、ようやく確保した席も赤子連れや夫婦や連れのいない盲人に譲って自分たちは立ったまま目

的地に到着し、講演のあとはまた帰りの満員の列車に乗って帰宅した。帰宅が夜の10時を過ぎることもあったという。昼食を抜くこともあった。しかし、ヒバードは一度も、このような講演はやめたいと書いたことがない。両親や友人に心配をかけたくないという思いはあっただろうが、もし本当に嫌であったら、講演を減らすことができたはずである。ヒバードがいつまでこの活動を続けたのかは分かっていないが、驚くべき精神力と使命感を持っていたというほかない。

ヒバードのアメリカを立出する直前の手紙を再度引用したい。その手紙の後半に、次のように述べている。

どの国も一国で問題を解決できないのですから、私たちは互いの経験を分かち合うことがとても大切です。私は、マッカーサー元帥が、宣教師たちを、たとえ困難が降りかかっても、日本人とほとんど同じ配給制度のもとに置いたことは¹⁷、(私たちが持ち込んだ食料は例外扱いしたとしても)、賢明な決定であったと思います。日本人が何に耐えているかを私たちが十分理解するには、その方法しかないのです。世界戦争を非キリスト者的方法で解決しようとしたことを償うにはその方法しかないのです。贖いの愛の原則を実践するには、それ以外の方法では不可能なのです。(ヒバード、UW-YMCA, 1946, 09, 04)

ヒバードは、1941年12月の真珠湾攻撃によって、自分の愛する日本に裏切られた思いをもった経験があるからこそ、同じように痛みを持つ者を理解できるようになったのではないだろうか。宣教師であっても、民主主義について、民主主義を具現していると思われるアメリカの生活について、自分に出来得限りの情報を提供することによって、少しでも日本人の助けになりたいと思ったのではないだろうか。

だからこそ、共に苦しみを分かち合い、日本が求められている民主国家の建設に寄与し、同時に神の国の建設にも寄与したいと願ったのではないだろうか。それがどんなに困難な状況にあっても地方への講演を断らなかつた理

由ではないかと推測される。

ヒバードを含め、宣教師の戦後活動はまだほとんど研究されていない。更なる研究がなされることを期待したい。

註

- 1 著者が主な資料としているのは、ウィスコンシン州立歴史協会のアーカイブ스에保管されている「ヒバード書簡」(Carlisle V. Hibbard Papers, 1811-1954 (Call number: Wis Mss QN; PH 1556).)、ウィスコンシン大学アーカイブ스에保管されているウィスコンシン大学 YMCA 関係の書類の Hibbard の項目 (Series 51/2 YMCA, Hibbard, C. V., Administration Records.)にある書簡、及びハーバード大学ホートン・ライブラリーに保管されているアメリカン・ボードの宣教師文書 (Harvard University — Houghton Library/American Board of Commissioners for Foreign Missions. American Board of Commissioners for Foreign Missions archives, 1810-1961. ABC 16.4.1) の中の Hibbard に関連する文書である。本稿の中で引用する場合、その出典を以下のように表記する。
 - ①ウィスコンシン州立歴史協会アーカイブスの手紙：手紙の差出人名とその日付を、例えば、(ヒバード、Wis-HSA, 1946, 03, 31) とする。
 - ②ウィスコンシン大学アーカイブスの YMCA ファイルにある手紙：手紙の差出人名とその日付を、例えば、(ヒバード、UW-YMCA, 1946, 03, 31) とする。
 - ③アメリカン・ボードの宣教師文書の場合：手紙の差出人名とその日付を、例えば、(ABC 16.4.1.+フォルダー名、Hibbard, Esther, 1946, 03, 31) とする。
- 2 戦後のアメリカや国際機関からの救援物資としては、ララ物資 (1946年11月～1952年6月)、ケア物資 (1948年～1955年) などがよく知られている (外務省、国際協力政府開発援助 ODA ホームページ、第二話「戦後の灰燼からの脱却」(https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/hanashi/story/1_2.html))。しかしそれだけでは十分でなかった。その隙間を少しでも埋めようとしたのが、宣教師など外国とのパイプをもつ人たちの個人的支援であった。『梅花学園九十年小史』(梅花学園九十年小史編集委員会編、1968、p.174.)には、元宣教師からの支援物資到着の記録がある。同様の支援は他にも多くあったと思われる。ヒバードの支援状況の一部は、拙著「ある女性宣教師の戦後通信：エスタ・L・ヒバードの1946年11月～1947年1月のハガキ」(同志社女子大学英語英文学会『アスフォデル』52号、2017、pp.47-77.)を参照していただきたい。
- 3 当時同志社総長代行を務めていた牧野虎次は、1941年3月8日の手紙で、アメリ

- カン・ボードに対して、デントンを除く同志社内の全宣教師に1941年3月31日付けで無期限の賜暇を与えるようにと要請した (ABC 16.4.1. v.72 (5 : 26) Makino, Toraji, 1941, 03, 08)。そのことは直ちに宣教師に伝えられ、ヒバードは翌日母への手紙に、「ついに私たちは退去通告を受け取った (“we did get our walking papers.”)」と書いた (ヒバード, Wis-HSA, 1941, 03, 09)。
- 4 ヒバードの博士号について、従来は文学博士だとされてきたが、ウィスコンシン州立歴史協会のアーカイブスに保存されている卒業式プログラムによると、専門分野は Oriental Civilization となっている。
 - 5 第二次世界大戦中にアメリカ陸軍が開発したプログラムで、下級将校と兵士を対象に、エンジニアリング、外国語、医療のような技術を必要とする分野に限定して、222以上の大学で実施された研修プログラムである。ミシガン大学の語学プログラムは、別名 Army Method とも言われ、暗記と反復練習によって、学習者に目標言語を短期間に効率よく習得させる教授法として有名である。
 - 6 ヒバードの最後のクリスマス説教は、たまたま録音テープが残っており、それを筆者が聞き取り、書き起こした。拙著「ヒバード先生の信仰体験：1972年クリスマス礼拝説教から」(同志社女子大学英語英文学会『アスフォデル』51号、1972、pp.149-168)を参照していただきたい。
 - 7 エスタ・L・ヒバード著、1999、『自伝—ある宣教師っ子の思い出』(発行：同志社女子大学、同志社同窓会)、p.57。
 - 8 第二次世界大戦が終わるころ、ヒバードはある夜夕食に招待され、その友人の家に入ろうとしたとき、入り口の階段を地下室まで転がり落ちたことがあった。しばらく気を失っていたが、目が覚めるとどこも骨は折れておらず無事であった。この経験によって、ヒバードは、神様が自分のような者にも御用があると悟り、不思議に命拾いをさせていただいたのであるから、国に残るといふ楽な選択をずるよりも、もし機会があれば、真っ先に日本へ戻って伝道を続けようと決心がしたと述べている。
 - 9 戦争情報局の日本分析作業については、福井七著、「ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する」『外国語学部紀要』第7号(2012年10月)、関西大学、pp.81-109、に詳しい。
 - 10 アメリカ軍の対日政策は、エドウィン・O・ライシャワー著(鈴木重吉訳)『日本《過去と現在》』1967年、時事通信社の第12章「戦争」、第13章「占領」(pp.202-255)に詳しい。
 - 11 日本の民主化は、ポツダム宣言第10条の以下の文言に基づいている。

、、、日本國政府ハ日本國國民ノ間ニ於ケル民主主義的傾向ノ復活強化ニ對スル一切ノ障礙ヲ除去スベシ言論、宗教及思想ノ自由竝ニ基本的人權ノ尊重ハ確立セラルベシ (ポツダム宣言 (外務省訳、原文) <http://home.c07>).

itscom.net/sampeipotsdam/potsdam.html より)

- 12 新聞記事は、ウィスコンシン大学アーカブスに、2社の切り抜きが残っている。*The Capital Times*の見出しは、“To Back Cause Of Democracy at Nip School”となっており、もう一社(新聞社名不明)の見出しは、“Her Return to Japan is Seen as Contribution to Democracy”となっている。両社とも発行日時は不明である。
- 13 この報告書には、ヒバードの戦後約3年間の仕事と生活について、その概要が簡潔にまとめられている。多くの友人との再会の様子や新しい仕事や出会いの様子が記されており、様々な活動をしたことが分かる。
(ABC 16.4.1 vol.70 (3 : 18), Hibbard, Esther, 1948, 03, 31)。
- 14 ヒバードの初期の講演活動は、1946年11月～1947年1月までに両親にあてたハガキに詳しく報告されており、子どもの家庭教育について、自分は子どもを育てたことがないのに、弟の子どもたちを例に挙げて話したこと、民主主義について女子高校生に話したこと、女性の生き方について会社の女子社員対象に話したことなどが記されている。詳細は拙著「ある女性宣教師の戦後通信：エスタ・L・ヒバードの1946年11月～1947年1月のハガキ」同志社女子大学英語英文学会『アスフォデル52号』、2017、pp.47-77.を参照されたい。
- 15 Jean H. Grant (1913-1961) アメリカン・ボード宣教師。1947年4月に夫ロバードとともに来日。社会科学を専門とし、同志社大学で社会事業を講じた。同志社女子大学でも囑託講師を務めた。
- 16 Robert H. Grant (1911-1974) アメリカン・ボード宣教師。1947年4月に妻ジーンとともに来日。専門は英米文学。同志社大学で米文学史を講じた。新制同志社女子大学のカリキュラム委員を勤め、リベラル・アーツの導入に貢献した。
- 17 当時の日本人の食料不足の様子は以下のように報告されている。
「1946年に入っても配給米の遅配・欠配が続き、5月の東京では配給量が220gに落ち込んだ。5月19日皇居前で25万人を超える都民が「飯米獲得人民大会」(食糧メーデー)を開いた、、、。1000万人の餓死者が出るとまでいわれ、飢餓が大規模な暴動へ発展するのをGHQが恐れたほど、事態は緊迫していたのである。」(薄井寛「戦中戦後の食料難を歴史教科書はどう書いているのか」JC総研レポート、2015年夏、VOL.34、p.25。(http://www.jc-so-ken.or.jp/pdf/ja_report_writer/H-Utsui/150623_01.pdf))
外国人も常に食料不足に悩まされていた。そのためヒバードは食料を送ってくれるように頻繁に両親に要求していた。その様子は、拙著「ある女性宣教師の戦後通信：エスタ・L・ヒバードの1946年11月～1947年1月のハガキ」『アスフォデル52号』同志社女子大学英語英文学会、2017、pp.47-77.)を参照されたい。